様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年３月３１日現在

機関番号：12611
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 ～ 2010
課題番号：20530566
研究課題名（和文） 教育価値観と葛藤解決の包括的研究：国際比較と世代間比較

研究課題名（英文） A Comprehensive Study of Educational Value and Conflict : comparison among countries and generations

研究代表者 加賀美 常美代（KAGAMI TOMIYO）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
研究者番号：40303755

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、教育価値観の国際比較、世代間比較を行い包括的に検討することである。短縮版教育価値観尺度(加賀美、2007)を用い７カ国・地域の大学生を対象に質問紙調査を行い検討した。その結果、マレーシア、日本、アメリカの学生は教育価値観の次元によって他国との相違が見出された。中国、韓国、台湾の学生は中間的回答傾向を示した。また、日本における教育価値観の世代間比較調査を実施し検討した結果、自己実現的価値観、社会貢献的価値観、伝統権威主義的価値観は、概して年齢が高くなるにつれ平均値が高くなり、一方、自由主義的価値観は年齢が高くなるにつれ平均値が低くなる傾向が見られた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to discuss comprehensively the results of Research on International and Intergenerational Comparisons Regarding Educational Value. I reviewed the results of my questionnaire research, which was made based on Simplified Version of Educational Value Scale, for university students in seven countries. The conclusion said that a clear difference existed in terms of Educational Value Dimension between the students in three countries (Malaysia, Japan and The U.S.) and other countries. It showed that students in China, Korea and Taiwan tended to situate themselves somewhere in between. With regard to Intergenerational Comparison which research was conducted in Japan, mean values gradually became higher with age in the Values of self-actualization,, social contribution, traditionalism (authoritarianism). In contrast, the mean value of liberalism had a tendency of getting lower with age.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：文化

キーワード：教育価値観、教育価値観尺度、葛藤解決、包括的教育価値観、国際比較、世代間比較

1．研究開始当初の背景：

日本が多文化社会に移行しつつある中で、日本人教師と留学生が接触する教育場面では解決困難な葛藤がしばしば生じるが、その背景には教育価値観の違いが存在すると考えられる。教育価値観とは望ましい教育について人々が抱く信念の集合体であり、理想的教師観、理想的学生観、理想的教育観から成る。これまで、加賀美(2003,2007)及び加賀美・大渕（2002,2004,2005）は、日本語教育場面における日本人教師と留学生との葛藤の原因帰属、解決方略、教育価値観に注目し、心理的メカニズムを探ってきたが、中国人留学生、韓国人留学生の葛藤シナリオに対する反応を分析した結果、次の 2 点が明らかになった。(1)学生は葛藤原因を教師要因に帰属させたときは対決方略を選択し、学生要因に帰属させた場合には協調方略を用いた。しかし、教師は学生の対決行動を予測できなかった(加賀美・大渕,2004)。(2)中国人留学生と韓国人留学生、日本人大学生の間において葛藤解決方略と教育価値観の反応に差異が生じた。特に、伝統(権威)主義的価値を重視する留学生が教師との葛藤状況において対決方略をとる傾向が見られた(加賀美・大渕,2005)。

一方、教育価値観については、加賀美・大渕(2002)は、10 か国の学生や日本語教師から自由記述をもとに収集した 192 項目を選抜し 45 項目に分類整理し、教育価値観尺度を開発した。45 項目を因子分析した結果（加賀美,2004）、12 個別次元が示された。それをもとに選抜し 31 項目の短縮版教育価値観尺度を開発した。しかしながら、留学生は、日本社会への異文化適応のプロセスとも関連があるため、母国に居住する大学生を対象に日本人大学生との国際比較研究を行い教育価値観の検討する必要がある。また、学生たちがいつ、どのような教育価値観が形成されているのか、発達段階によって異なる可能性があるため、特に小学校、中学校、高校、社会人など年代・世代間比較を行う必要がある。

2．研究の目的：

本研究の目的は、教育価値観の国際比較調査研究、世代間比較研究を一般的価値観に関連付けながら包括的に検討することである。まず、中国、台湾、韓国、マレーシア、タイ、アメリカ、日本の 7 カ国・地域の大学生を対象に、短縮版教育価値観尺度を用いて、教育価値観の比較を行い検討する。次に、日本における教育価値観の年代・世代間比較を行い、多角的、包括的に教育価値観について検討を行う。日本における世代間比較においては、いつどのような教育価値観が形成されているのか、発達段階によって異なる可能性があるため、14 歳・17 歳・20 歳(いずれも学生)の各 100 名、25-29 歳・30 代・40 代・50 代・60 代の各 150 名を対象に世代間・年代間比較を行う。

3．研究の方法：

(1)7 カ国・地域の教育価値観、価値観に関する実証的研究の文献レビューを実施した。

(2)教育価値観尺度(加賀美,2007)、一般的価値観（Schwartz 他,1992)との関連性も含め検討するため、質問紙調査を用いて中国、台湾、韓国、マレーシア、タイ、アメリカ、日本の 7 カ国・地域の大学生を対象に実施した。日本語による質問票を作成した後、6 カ国の翻訳版を作成し、バックトランスレーションによって翻訳の妥当性を確認した。

(3)日本において 14 歳・17 歳・20 歳(いずれも学生)の各 100 名、25-29 歳・30 代・40 代・50 代・60 代の各 150 名を対象に教育価値観と一般的価値観について質問紙調査をインターネットによって実施した。統計的分析を行った。

4．研究成果：

2008 年度

本研究の目的は、教育価値観の研究成果(加賀美 2007)をさらに、国際比較調査研究を一般的な価値研究の中に関連づけながら包括的な教育価値観研究に体系づけていくことである。質問紙調査では、短縮版教育価値観尺度を用いて、中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、アメリカ、日本の 7 カ国の大学生を対象に、国際比較調査のデータ収集と分析を行った。台湾 3 校、韓国 4 校、マレーシア 1 校、中国 1 校、日本 5 校、タイ 2 校、アメリカ 2 校の 7 カ国 18 校の大学生を対象に質問紙を配布し回収した結果、有効回答数は、台湾 245 名、韓国 251 名、マレーシア 199 名、中国 207 名、日本 259 名、タイ 174 名、アメリカ 106 名の合計 1441 名（男性 641 名、女性 800 名）となった。

教育価値観の理想的教師観(専門性、熱意、学生尊重、教師主導)、理想的学生観（学習意欲、規則遵守、従順）、理想的教育観(文化的視野、人材教育、社会化、

創造性、自主独立)の別に、7 カ国・地域の大学生を対象に 12 価値次元の一元配置分散分析を行い、平均値を測定し Bonferroni 法による多重比較を行い検討した。その結果、7 か国・地域の学生の平均値の中で最も高い得点に着目すると、日本学生は、「専門性」、「規則遵守」、「社会化」「自主独立」、タイ学生は「熱意」「学生尊重」「人材教育」、アメリカ学生は「教師主導」「文化的視野」、マレーシア学生は「学習意欲」「従順」「創造性」であった。中国学生、韓国学生、台湾学生は突出して高い価値はなく中間的回答傾向を示していた。

2009 年度

2009 年度は Schwartz(1992)の価値観研究をもとに、中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、アメリカ、日本の 7 カ国・地域の大学生を対象に、質問紙調査を行い、当該国の大学生がどのような一般的価値観を有するか、その異同を比較検討することを目的とした。質問票は Schwartz(1992)の個人レベル価値尺度の 56 項目、9 件法を用いた。台湾 3 校、韓国 4 校、マレーシア 1 校、中国 1 校、日本 5 校、タイ 2 校、アメリカ 2 校の 7 カ国 18 校の大学生を対象に質問紙を配布し回収した結果、有効回答数は、台湾 245 名、韓国 251 名、マレーシア 199 名、中国 207 名、日本 259 名、タイ 174 名、アメリカ 106 名の合計 1441 名（男性 641 名、女性 800 名）となった。分析方法は、価値尺度の 56 項目を個人別に標準化した。10 個の価値タイプ（勢力、達成、快楽主義、刺激、自己志向、普遍主義、思いやり、伝統、同調、安全）を構成する項目の平均値を算出し、それを下位尺度得点とした。一元配置分散分析を行い Bonferroni 法による多重比較を行った結果、いずれの価値タイプにおいても 7 カ国間で有意差が認められた。7 カ国の学生の平均値の中で、最も高い得点に着目すると、韓国学生は、「勢力」、「達成」、「同調」が、台湾学生は「刺激」が最も高い傾向が見られた。日本学生は、「快楽主義」が最も高く、アメリカ学生は「自己志向」、「普遍主義」が最も高い傾向が見られた。タイ学生は「思いやり」、「伝統」が最も高く、マレーシア学生は「安全」が最も高い傾向が見られた。中国学生は突出した価値タイプの内容は示されず、中間的傾向を示した。

2010 年度

アジア諸国(韓国、台湾など)に居住する小学生、中学生、高校生、大学生の日本イメージの形成過程を検討した(加賀美・守谷ほか,2008)研究では、韓国においては中学生の時期に否定的イメージが形成され、その後、大学生に至るまで定着する傾向が見られた。教育価値観に関しても、学生たちがいつどのような教育価値観が形成されているのか、発達段階を加味し検討する必要性がある。

本研究は日本においてどのような教育価値観(加賀美,2007)がいつ形成されるか、発達段階によって多様な世代の人々の価値観を比較し検討することを目的とした。特に、Schwartz(1992)の 10 価値タイプと教育価値観の 4 つの包括的価値観の関連については、理論的仮説を検討した研究はあるものの（加賀美,2006)、実証的には検討していないため、本研究ではその関連を検討しつつ世代間比較を検討した。

方法については、短縮版教育価値観尺度（加賀美,2007）31 項目、および Schwartz(1992)の個人レベルの価値尺度 56 項目を採用した。インターネットリサーチモニターに対する Web 調査で配布、回収を行った。対象者は、14 歳・17 歳・20 歳(いずれも学生)は各 100 部、25-29 歳・30 代・40 代・50 代・60 代は、各 150 部とした。4 つの包括的教育価値観である、自己実現的価値（教師の専門性、熱意、学生の自主独立、学習意欲）、伝統(権威)主義的価値（教師の教師主導、学生の従順と規則遵守）、自由主義的価値（学生尊重、創造性）、社会貢献的価値（人材育成、文化的視野、社会化）の平均値を算出し得点とした。これらを年代・世代ごとに対象者群間で比較するために、一元配置分散分析を行い、Bonferroni 法による多重比較を行った。その結果、自己実現的価値観、社会貢献的価値観、伝統（権威）主義的価値観については、概して年齢を経るに従って平均値が高くなるというほぼ類似した傾向が見られた。一方、自由主義的価値観は年齢が経るに従って平均値が低くなるという傾向が見られた。さらに、年代毎に有意差があった Schwartz の 5 価値タイプは、25 歳-29 歳を境に 2 分化傾向がみられたことからライフイベントと関連付けられた。このことから、教育価値観と Schwartz の価値観は年代・世代によって一定の関連がみられたことが示された。

今後の展望

教育価値観の国際比較研究の結果、大学生の価値観は国、次元によって差異が明確になったが、その背景には教育政策、

家庭・学校教育、宗教的要因などの影響が推測される。また、日本における一般的価値観の形成過程については、25-29歳代の時期が分水嶺となり年齢を経るに従って低下し、教育価値観の形成については、中学生以降の時期が形成時期で年齢を経るに従って強化されることが推測される。

今後は、国別に価値観の形成過程と背景要因の検討することによって、昨今、グローバル化が急速に進行しているアジア諸国や日本において、教育価値観、一般的価値観がどのように形成され、どのように異なるか、熟知することで、さまざまな異文化間葛藤への対処行動への示唆が得られる。また、いつ、どのような教育価値観が形成されるかについて明らかになれば、どういう年代・世代の人々に、どのような異文化間教育プログラムを作成し実施したら効果的であるかも明らかにできる。これらの知見により国内外の多文化間教育および多文化共生社会に向けての貢献ができる点で意義がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４　件）

(1) 加賀美常美代・大渕憲一　2010　教育価値観の年代・世代間比較　日本社会心理学会第51回大会発表論文集　pp578-578　（査読無し）

(2) 加賀美常美代　2010 日本語学習者の教育価値観の国際比較：7 カ国の大学生調査　世界日語教育大会論文集　pp1239 (0-9)（査読無し）

(3) 加賀美常美代・守谷智美・楊孟勲・堀切友紀子2009　台湾における小学生・中学生・高校生・大学生の日本イメージ形成：９分割統合絵画法による分析　『台湾日本語文学報』　26号　pp258-308　（査読有）

(4) 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・沈貞美 2008　韓国における小・中・高・大学生の日本イメージの形成過程：９分割統合絵画法による分析から　『異文化間教育』　28 号　pp60-73（査読有）

〔学会発表〕（計　6 件）

(1) 加賀美常美代 2010 大学生の一般的価値観の国際比較:7 カ国の調査から」　多文化間精神医学会第 17 回大会　『こころと文化』９巻２号 pp155-156

(2) 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・楊孟勲・堀切友紀子　2009　韓国と台湾における小・中・高・大学生の日本イメージの形成過程の差異　異文化間教育学会第 30 回大会

(3) 加賀美常美代・守谷智美・楊孟勲・堀切友紀子　2008　台湾における子どもたちの日本イメージの形成要因：描画の分析から　異文化間教育学会第 30 回大会

異文化間教育学会29回大会

(4) 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙 2008　韓国の小・中・高・大学生の日本イメージと関連する要因 ―日本語学習と異文化接触に　2008 年度日本語教育学会国際大会

〔図書〕（計１　件）

(1) 加賀美常美代　2011　教育価値観と葛藤解決の包括的研究：国際比較と世代間比較　科学研究費補助金研究成果報告書　pp1-98

〔その他〕
ホームページ
http://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/jle/kagami/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者
加賀美　常美代（KAGAMI TOMIYO）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
研究者番号：40303755

(2)研究分担者
大渕　憲一（OHBUCHI KEN－ICHI）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：70116151